令和４年度　第２回小平市総合教育会議　議事録

１　日　時

令和４年１２月２３日（金）午後１時３０分から２時５５分

２　場　所

中央公民館　２階 学習室４

３　出席者

（構成員）小 平 市 長　　小林　洋子

教育委員会

教育長　　古川　正之

教育長職務代理者　三町　　章

委　員　　丸山　憲子

委　員　　青木　雅代

委　員　　望月　克浩

（構成員以外の出席者）

有川企画政策部長、白倉教育部長、岡﨑教育指導担当部長、安部地域学習担当部長、奥村政策課長、事務局職員２名

（傍聴者）２名

４　会議内容

午後１時３０分　開会

（開会宣言）

〇小林市長

おはようございます。市長の小林でございます。

定刻になりましたので、ただいまより、令和４年度 第２回小平市総合教育会議を開催いたします。進行につきましては、会議の主催者である私が務めさせていただきます。

教育長、及び教育委員の皆様には、日頃より小平市の教育行政の推進にあたりまして、ご尽力をいただき、改めて感謝を申し上げます。

さて、この度、１１月１日付けで新たに望月委員を教育委員に任命いたしました。今回が初めての総合教育会議となりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、望月委員に一言ご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

〇望月委員

初めての総合教育会議の出席で大変緊張しております。今まで地域活動等を通じて小平のことを知り、今回このような重責を担うこととなりましたので、少しでもお役に立てればと思っております。

思うような発言ができない場面もあると思いますが、精いっぱい務めさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

〇小林市長

さて、本年度の第１回の総合教育会議では、１０年先を見据えた小平市の教育が目指す方向性について協議・意見交換を行いました。

教育委員の皆様より、様々な観点からのご意見をお聴ききし、私が思い描く１０年先を見据えた小平市の教育が目指す方向性と、教育委員の皆様が思い描く１０年先を見据えた小平市の教育が目指す方向性が、おおむね一致していることが確認できました。

（協議事項）

〇小林市長

本日の令和４年度第２回のテーマは、「体験活動を通じた心の育成について」でございます。

新型コロナウイルス感染症の影響により、直接的な人と人とのつながりが希薄化し、長期総合計画に掲げるまちづくりの基礎となる「人づくり」の一端を担う学校教育においては、その影響は大きく、直接体験の機会は大きく減少しており、今後、体験活動をどのように行っていくのか考えていく必要があると捉えております。

また、現在策定が進められている（仮称）第二次小平市教育振興基本計画（素案）の基本理念に、これまでにはなかった「体験」が追加されるとともに、本年度第１回の総合教育会議におきましても複数の委員から、「体験」の重要性に関する発言がございました。

将来の担い手である子どもたちの、人間関係を構築するコミュニケーション能力や、自立心などを養成していくためには、体験活動は重要であり、ウィズコロナ時代において、今後、どのように体験活動を行っていくべきか、について意見交換できればと思っております。

それでは、まず始めに事務局から、体験活動の実施状況などについて説明をお願いします。

〇岡﨑教育指導担当部長

それではお手元の資料をご覧ください。初めに体験活動の意義やねらいについてでございます。意義については、学校教育法や学習指導要領において資料に記載のように示されております。平成１７年の中央教育審議会答申においても基礎的な知識、技能の育成、いわゆる習得型の教育と、自ら学び自ら考える力の育成、いわゆる探求型の教育とは対立的、あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要であるとの観点から、例えば自然の中での長期集団宿泊型体験機会の拡充など様々な体験活動の重要性が指摘されています。

また、携帯電話やインターネットの普及による情報化社会の中で、子どもたちは多くの情報や映像などを世界中から収集し、バーチャルな世界を通して間接的に学んだり、疑似体験をしたりすることができる環境となっています。一方で、身体全体で対象に働きかけ、見る、聞く、味わう、嗅ぐ、触

れるなど、感覚を使い事象と直接触れ合う体験がいわゆるコロナ禍の影響もあり、特にこの３年間ほどは実施が困難な状況でした。直接的な体験は子どもたちの成長の糧となり、生きる力を育むために必要なものと考えます。生活体験や自然体験など、体験の機会を発達段階に応じて意図的、計画的に教育活動に取り入れていくことが今後の学校教育においては一層求められると考えこの資料を作成しております。

裏面をご覧ください。資料左側には学習者用端末を活用した体験活動を記載しました。各校は直接体験が叶わないこの状況の中、様々な工夫をしながら児童、生徒に体験の場を計画し、実施してきました。これらの学習活動は、デジタルを活用することで得られた新たな体験といえると考えます。資料右側には各校で多く実施されている体験を中心とした学習活動の例です。また資料にはございませんが、小平市では「共に生きるまち小平」という副読本を作成し、小学校四年生児童に配布しています。お年寄りや障がいのある方、特別支援学校との交流や、地域の方と地域をよりよくする活動に取り組むことについて示しており、各校は体験を取り入れながら子どもたちに交流や共同学習の大切さ、多様な人や様々な考えに触れ、自分も周りの人も大切にすること、認め合うことの意味などについて考えさせる学習を進めています。このように小平市立学校ではリアルとデジタルの良さを生かし、多様な体験活動を計画的に実施しています。様々な体験活動を通して（仮称）第二次小平市教育振興基本計画素案の基本理念や、小平市の教育が目指す人間像の実現に向けた取り組みを進めています。

説明は以上です。

〇小林市長

それでは、皆様から、ご意見を伺いたいと思います。まず、三町教育長職務代理者より、お願いします。

〇三町教育長職務代理者

今回は学校教育に焦点を当てたテーマということで、大変ありがたく思っています。体験活動の受け止めと、私から見た小平の現状についてお話しさせていただきます。

まず事務局が用意した資料ですが、本当に感心しました。本当によく体験活動をまとめてくれています。教育基本法が大改正されて、それに伴い学校教育法も見直され、その時に体験活動が位置付けられたと理解しています。

表面で、法律的な位置付けの中で、どのような体験があって、それは何を目指しているか、また、どのような価値があるのかがよくまとめられていると感心しました。

また裏面には、コロナ禍における具体的な体験活動や、体験型の学びなどが記されています。一番下の（仮称）第二次小平市教育振興基本計画（素案）の基本理念の「学び・体験を通して」の部分について、非常に良いと思って感心しています。基本的施策１の「確かな学力の向上」に「体験活動の充実」を位置付けているということ、「学び」と「体験」は一体であると強く打ち出しているところ

が、計画の構造として大変よく考えられていると強く感じました。

さらに、「学びに向かう力、人間性等」を育みます。という部分があります。学校教育法第３０条において知識及び技能、思考力、判断力、表現力と主体的に学習に取り組む態度の３つを学力として定義しています。これらを捉えて学力だという中の、主体的に学習に取り組む態度が学びに向かう力、あるいは人間性であると思っています。

主体的に学習に取り組む態度というのは、外からは見えないわけですが、いざという時に行動を起こせる、柔道で言えば「構え」に当たり、学びに向かう力や人間性、つまり道徳的なものも含めて学力だということです。

いざという時に高齢者に声を掛けるなど、そのような力を育てるということが一体として学力であると私は考えています。その様な力を付けてお互いに認め合うという方向性をしっかりと出している計画であると思っています。

その中で「体験」とは、大きなダイナミックな体験ではなくとも、普段の授業の中での体験でも良いわけです。例えば数学でも、立体模型の観察があります。サイコロなどの形である直方体の授業で、これを切ったらどんな面ができるだろうかと考えた時に、いろいろ体験して直方体を見れば、こう切れば三角形になる、また、こう切れば四角形になると分かります。体験せずに単に頭で学習しても本当には身にならない。そういった意味で、普段の細かいところでも体験を大事にしていく必要があると思っています。

小平の様子を見させていただくと、資料の裏面の左側に挙げられているこのような体験、あるいは類似の体験活動について、やむを得ずコロナ禍で取り組んだものと、ＩＣＴ環境があることからより積極的に取り組んだものがあると思います。そういう状況の中でも実体験をすることが絶対に大事だと考えています。例えばハンセン病資料館は、やはり小平であれば、オンラインより絶対に行った方が良いです。オンラインの環境で見てから実際に行くのは大事だと思いますが、オンラインで学習を終わらせるものではないと思います。

一方で、オーストラリアや小平町の子どもたちとオンラインでつながり、「小平町はこんなに雪が降っていますよ」「小平市はこんなに晴れて明るいですよ」などといった地域による気候の違いを体験する活動を、１０分、１５分のわずかな時間でも行えれば、体験型授業として学びが深まると考えます。

コロナ禍とあいまってＧＩＧＡスクール構想が前倒しで推進されてきている状況がありますので、そこを整理して体験を大事にして欲しいと思っています。ただやはり、元に戻すべきものは戻すべきだと思っています。やらないことである意味学校が若干楽になっている傾向がみられ、少し危険性を感じています。職場体験もその１つで、準備が非常に大変ですが、それを乗り越えた時の子どもたちの体験というのは、その後の生活や、人との関わりの中で生きていくことにつながります。オンラインと実体験、両面の体験を整理してやっていただきたいと思っています。

この間、学校訪問で授業を見させていただきましたが、教室でオンラインでの工場見学をしていました。画面の向こうには解説者がいて、オンラインで子どもたちとやりとりをしている。これは新し

い形で、教科書だけの授業ではなく、そこにわずかな時間でも疑似的な体験ができるという取組は非常に大事であると感じました。このような体験を積極的にやるべきだと思います。

一方で、先ほども言いましたように、オンラインの体験で終わりではなく、重点化してどれかは本物を見せることが大事であると思っています。６０年前の話になりますが、当時私は広島に住んでいたものですからマツダの自動車工場に見学に行きました。新車開発まで７年かかるという話が今でも印象に残っています。また、たくさん並んだ車の爽快さや、音、におい、そういったものが非常に印象に残っています。こういった実体験について、どこで何をさせるのかというところをしっかり押さえていくことがこれから大事であると思っています。

これからというところで、体験はいろいろさせればいいのですが、ここ二十年ほどの間にどんどん行事が削減されてきています。その中で残ってきたものをどう効果的に行っていくかは学校の工夫だと思っています。

一方で重点化させて生かしていくには何らかの支援ができないかと思っています。例えば小平町とのオンライン交流については、事務局がコーディネートするといったことも必要だと思います。コロナ禍前の水準に戻すけれども、それに加えてＩＣＴ環境を生かした事業を進めていく。今、私が気になっているのは子どもの人間関係の問題です。人間関係の希薄化もあるとすれば、「同じ釜の飯を食う」や「寝食を共にする」などといわれますが、宿泊に関わる行事については充実あるいは学年を拡大するといったことが必要ではないかと思います。

宿泊に関わる行事を通して、友情やお互いを思いやる心、あるいは集団生活において必要なルール、マナーを学ぶことなどが求められていると思います。これは学校だけでは難しいので、何らかの支援策が必要になると思います。ぜひそのような方向で進めていくのがこれからの小平の子どもたちにとってプラスになっていくのではないかと思っています。

○小林市長

工場見学でいろいろなところに実際に行くとなった場合は１か所しか行けませんが、オンラインであれば何か所も見られるということがＩＣＴを活用したプラスの面だと思います。私も子どもの頃にパン工場に見学に行った時のパンのむせ返るようなにおいは今も覚えています。そういうことは画面ではなく、体験しないとできないということの１つではないかと思います。

リアルとオンラインの組み合わせの仕方、どれをオンラインにして、どれをリアルにするのかというのは、学校で工夫していただいていると思いますが、子どもたちにより多くのリアルな体験をしていってもらいたいと思います。

また、「同じ釜の飯を食う」ということ、泊るということは特別なものがあると思っています。私も自分自身が八ヶ岳に行ったことをまだ覚えていますし、本当に楽しい思い出だったと思っています。そうした体験を通して得られるものは本当に掛けがえのないものだと改めて思い返したところです。

つづきまして、丸山委員お願いします。

○丸山委員

博物館の側から体験学習について見てしまうのですが、博物館はもともと本物があり、それを見るというのが第一義です。例えば鈴木遺跡で石斧を見る、上野動物園でパンダを見るというのは第一義ですが、時代の変化とともにそれをどういう風に見せるか、どういう風に教えるかを考えて、展示や映像、音声ガイドなどを活用するようになりました。

博物館では参加型や体験型が重要であると言われ、手を使って何かを体験する「ハンズオン」が高度経済成長期以降主流でした。ただし、映像を見るためのボタンを押すだけではハンズオンとは言いません。また、最近では心を動かす「マインズオン」が重要だと言われています。そういった視点から博物館では展示方法などを考えていますが、実際ただ見るだけではなく、味わう、においをかぐ、触ってみる、聴くなど、五感を使ってそこで空気を共有するというのが博物館においては重要となっています。

体験というのが人にとっては重要で、五感を使って様々な体験が人の中に蓄積されていくのだと思います。学力の定着や向上に即座につながる訳ではありませんが、様々な体験が将来何かをするきっかけや可能性を増やす土壌になっていき、十年後、二十年後に「ああ、あれを見たな」「そういえばこれをやったな」と、点と点が結ばれるような感じでその人の心の中、身体の中でつながり、転機になっていくのではないかと思います。

そういう意味で、子どもにはたくさんの経験を積んで欲しいと思っています。たくさんの可能性を増やすために、１つのことを深く追求して体験するのではなく、いろいろな経験をさせることが学校教育では重要ではないかと思います。

学校訪問の際に見学させていただくと、先生方もいろいろ工夫をして授業を展開していらっしゃいます。例えば朝顔を育てて、観察するといった教科に密着したこともそうですし、学芸会や展覧会という行事もそうです。縦割りの活動なども子どもたちにとっては重要な体験になっていくのではないかと思います。

鈴木遺跡資料館や平櫛田中彫刻美術館、ハンセン病資料館など、周辺の博物館の活用をぜひ進めていただきたいと思っています。また、ふれあい下水道館はすばらしい施設であると私は思っています。体にまとう湿気やにおい、下水道管の大きさや暗さは、五感で感じないと分からないことですので、体験した子どもたちの可能性を刺激し、ふれあい下水道館に行ったことが直接の引き金とはならないかもしれませんが、間接的に何かが起こるきっかけになるのではないかと思います。

体験するだけ、体感するだけでも重要ではありますが、複合的な体験にすることがより効果的だと思います。例えば、「博物館に行って見学した」や「良い絵を見た」だけではなく、そこの中のカフェでおいしいケーキを食べた、展覧会とコラボレーションした食事を摂った、ミュージアムショップでポストカードやぬいぐるみを買ったといったことなどです。こうした「見学した後に買ったよね」や「展覧会で絵を見たあとにこれを食べておいしかったね」という体験が記憶のインデックスとなり、それが多ければ多いほど、あとになって体験が思い起こされると思います。

学校活動で考えると、昔の電気がない時代の生活を教える時に、火鉢を使っていたといっても、ただ火鉢を見せたり炭で火を起こしたりするだけでなく、起こした火で餅を焼いて食べるなど、様々な体験を複合的に取り入れることが重要ではないかと思います。特に「食べる」という行為は、舌で味わうだけではなく、食感や目で見て感じるおいしさなどもあり、より記憶が蘇りやすいものだと思います。コロナ禍においては逆行することかもしれませんが、「食べる」ことを含んだ体験を今後学校では実施して欲しいと思います。

いろいろな体験をするという視点から話をしてきましたが、体験したことをアウトプットすることも非常に重要ではないかと思います。学校では遠足や運動会のあとに、感想文や絵を描いていますが、体験したことを自分の中で整理して文章に残すことや、イメージした絵を描くといったことをするとより定着するのではないかと思います。描いた絵を後々見て、「そういえば」と思い起こすきっかけにもなります。そこまでを一括りにしていろいろな体験を考えて欲しいと思います。

また、人とのコミュニケーションは最大の体験になると思います。博物館体験の中でも学芸員やボランティアに話を聞いた、という、人と人との出会いや人と話した体験は、記憶の定着に欠かせないものです。人と人とのつながりがなかなかできないご時世ですが、職業体験やいろいろな人とのふれあいも、感染対策をした上で、ぜひやって欲しいと思います。

最後に注意が必要なのは疑似体験についてです。ハンセン病資料館を映像で見ることは、あくまでも疑似体験です。行けるところは行って体験しないといけないと思います。映像やデジタルで見ると、分かったつもりになってしまい、本質まで捉えられていないところがありますので、取捨選択していくべきだと思います。

しかし、Zoom などを使って遠隔地とオンラインでコミュニケーションを取ることは、今までできなかったコミュニケーションができるという意味ではやるべきものだと思います。以前小平町との少年少女交歓交流事業に同行し、視察させていただきましたが、すばらしいアンモナイトが発掘されています。異常巻きアンモナイトという世界的にも有名なものです。

オンラインで向こうの学芸員に発信してもらったり、場合によってはそのアンモナイトを借りて教室で見たり、触れたりできるとよいと思います。ＩＣＴを使ってできることはやる、実際に体験することはする、というような取捨選択をして欲しいと思います。疑似体験は、あくまでも疑似なのでその点は気を付けて欲しいと思います。

○小林市長

博物館の展示は本当に変わってきています。「マインズオン」は初めて聞きましたが、心を動かしていくためにはどうしたら良いのかと博物館が工夫していて、今後さらに進化していくのではないかと思うところです。これまでは動物は見てくださいで終わっていたところを、餌をやるために歩かせたことで、人の心を動かし、人気が出たというのを改めて思い出しました。

工場見学が簡単だからずっとやるということではなく、工場見学の時に食べ物を食べるとか、何かを育てるなど、体験の種類を増やしていくことも重要であると思っています。学校でもいろいろと工

夫していただいていると思います。私は「子どもたちの引出しを増やしてあげたい」と常々思っています。子どもたちが体験したことが記憶となり、その子の引出しにしまっておいて、時々その引き出しを開けて思い出しながら、また体験を積み重ねていくということが子どもたちの選択肢を増やすきっかけになるのだと思います。

それではつづきまして、青木委員お願いします。

〇青木委員

今年度になりコロナ禍で中止されていた行事が徐々に再開されつつある中で、この３年くらいの間に行事などができなかった影響の大きさを強く感じさせられるようになりました。コロナ禍の状況を考えた時に、今まで行ってきていて当たり前のように考えていた体験活動が、いかに大切なものだったかを皆が感じるようになったのは確かだと思います。事務局が用意した資料の実践例にあるように、コロナ禍でオンラインによる体験活動の方法が多く考えられてきました。遠く離れた海外の人たちと簡単に交流できるのもオンラインだからこそだと思います。工場や施設の見学もこうして気軽にできるようになりました。

しかしこれらの交流や見学も、現地で実際に見たり触れたりする体験と比べると物足りないものがあります。また画面からは見られないものの中から得られるものもあると思います。画面の脇にあるものが子どもたちの好奇心を掻き立てたり、関心を引いたりすることも多いものです。できるだけ現地に赴き実際に体験してみることを多くしていけると良いと思っています。

今後はオンラインと実地とのメリハリある活動ができると良いと思います。これからの社会を担っていく子どもたちにとっては、学校行事の中で仲間と共に体験することは本当に大切だと感じます。何かを成し遂げるために工夫し、努力し、失敗することもあると思いますが、みんなでその感動を共有する体験は何ものにもかえられないものと思います。

今年度は中学校の合唱コンクールや小学校の連合音楽会が開催され、鑑賞させていただく機会がありました。私たちの後ろに子どもたちが座っており、舞台から戻ってきた子どもたちが「すごく緊張した」、「ずっと脚が震えていた」と話していた言葉が印象に残っています。そして自分たちが終わった後、先輩の合唱や他校の演奏を聞いて、「やっぱり先輩はうまいな」「他校の子すごいな」など、自分たち以外のことをほめたり、認めたりしている姿も印象に残っています。子どもたち自身が成し遂げたという実感はもちろん大切ですが、そこにそれ以上の感動や感情が生まれるのが行事のすばらしさだと改めて感じることができました。

また、プロが演奏する場である「ルネこだいら」で発表できることは小平ならではのことで、なかなかできない素晴らしいことです。子どもたちの自信、自慢といってもいいかもしれませんが、自信につながる良い体験だと思いました。これもコロナ禍前は当たり前に行ってきた行事ですが、コロナを経て今後も止めることなく続けていくことが大切であると思いました。

小平には中学校の全日本音楽コンクールで連続して金賞を受賞できるほどの実力を持った中学校があります。そして市内の他の中学校も全体的に吹奏楽部の活動が盛んなように思います。小平青少年

吹奏楽団など市内で活動する楽団もあり、定期演奏会も行っています。また、自衛隊の音楽隊に所属する保護者の方々が学校などで演奏会を行う様子も拝見しました。

小平には多くの子どもたちが感動するような芸術を身近に届けられる環境があり、心を動かすような芸術を鑑賞する機会に恵まれていると思います。また、文化庁の文化芸術による子どもの育成推進事業の巡回公演事業や、芸術家の派遣事業を利用されて、学校にオーケストラや音楽家、その他の芸術家を招いている学校もあるようです。学校単位で良いと思いますので、そのような鑑賞が全校で定期的に可能になるように小中で連携することや、交渉できる方法を明確にするなど、各校がより気軽に機会を得られる方法を提供できると良いのではないかと思います。

コロナ禍のような状況でも屋外の活動は比較的取り入れやすいと思います。ずっと続いている、学童農園などで農作物を育てて収穫し、それを自宅に持ち帰って食べるという体験は今後も長く続けていけると良いと思いました。今年度私は中学校の校庭で一生懸命大根を育てている生徒の姿をずっと見続けていましたが、植物はきちんと世話をしないと育ちません。中学生なのでもっと冷静な感じで対応しているかと思いましたが、本当によく世話をしていて、大切に観察し、その成長を楽しみにしている姿が見られました。

「この大根の方が大きい」や「この大根はまだ小さい」など、人とも比べながらその中で育てる喜びとともに世話をする大変さも自然に学んでいたと思います。こうして五感を刺激する、土に触れる体験というのは感性を育て、心の安定にもつながると聞いたことがあります。また、小平のように農地が残り、協力してくださる方々がいる土地ならではの取組ではないかと思いますが、これも長く続けられたら良いと思います。

先日訪問させていただいた小学校では、子どもたちが花の苗を花壇や植木鉢に植えて玄関先をきれいに飾っていました。多くの学校では花壇の世話を保護者や地域のボランティアが担っていると思いますが、こういうことも子どもたちと一緒に活動できたらより良いものになるのではないかと思いました。

もう１つ、野外の活動として、青少年リーダーの活動が今回の教育委員会だよりに掲載されていました。キャンプファイヤーやテントの設営などの様子でしたが、このような野外で行う自然体験活動をもっと多くの子どもたちに体験させられる機会があると良いのではないかと思いました。

コロナ禍前はほとんどの学校で実施されていた福祉体験も、今後続けていけるようになると良いと思っています。視覚障がい者ご本人のお話を聞き、盲導犬の役割を知り、実際に白杖を使用したり、介助の人についてもらったりしながら歩行するという体験ですが、この体験を通して障がい者への理解を深め、自分たちに何ができるかということが分かってくると思います。ブラインドサッカーのような目を隠してサッカーをするという体験をしていた学校もあったと思います。こういうことは子どもたちと一緒に保護者の方にもぜひ参加していただき、子どもたちの活動を知ってもらうとともに、保護者の方にも理解を深めていっていただけたら良いと思います。

また、ボランティアの精神を育むという意味で奉仕体験の活動の機会が増えると良いと思っています。ボランティア精神は、他の様々な活動の中で育まれていくものだと思いますが、今の世の中、今

までボランティアで成り立っていたところも外部委託をすればよいという、お金で解決する流れも出てきていますので、より一層奉仕体験などに取り組み、今後小平の将来を担っていく子どもたちにボランティアの心を育む体験をさせていけたら良いと思っています。

具体的な事例を考えるのはなかなか難しかったのですが、災害という場面を考えてみました。どのような災害が起こるか、どこで起こるかは分かりません。先ほど「いざという時に発揮できる力」という委員のご発言がありましたが、今後、市内の学校が避難所になった時に、そこで率先して動ける人となれるような体験活動をより多く取り入れていけると良いと思います。

学校ごとに避難所管理運営マニュアルを用意していると思いますが、実際のトイレや体育館内のパーテーションの組み立て方など、率先してできる方はまだ少ないと思います。いざというときに活動できる人を目指し、そのような取組が多くの学校でできると良いと思います。

また、１１月末に行われたマラソン大会にはたくさんの小学生が参加していましたが、中にはマラソンは少し苦手という小学生もいます。そういった子どもたちのために、年間を通して市内でスポーツのイベントが開催されており、各校でも基礎体力の向上に向けた取組をしていると思います。

先日学芸大の先生から、子どもの頃にスポーツに親しんだ子どもの方が、大人になってからもスポーツに取り組みやすいというお話を伺いました。子どもの頃にスポーツを楽しむことは、生涯にわたっての健康にもつながっていきますので、今後もぜひ様々なスポーツを楽しめる機会を増やしていけたら良いと思います。

先日、立川に開設される体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY GREEN SPRINGS」を見学させていただきました。先行施設での実績があること、まだオープンしていませんが多くの予約が入っていることを伺いました。修学旅行で全国からの訪問があることを知り、英語学習を楽しいものと感じ、今後の学習目標を持たせつつ、国際感覚を培える施設として、小平市の近くに開設されるこの施設をぜひ多くの学校が利用できるよう働きかけていけたら良いと思います。

子どもたちに体験して欲しいことはたくさんあり、学校の決められた時間の中で取り組んでいくのはかなり難しい面もあるかと思います。今までもずっと活動していただいていますが、青少対活動や放課後子ども教室、PTA など保護者の団体、地域の方々で補えるような仕組ができていくと良いと思います。より多くの人と関わることは子どもたちの成長にはとても必要なことであると思います。まだまだコロナ感染については予防対策をしていく必要があると思いますが、今後も多くの協力者を得ながら子どもたちの体験活動を支えていけると良いと思います。

小平には子どもたちの体験を一緒に実現していけるような市内や近隣の大学、FC 東京などのスポーツ団体、また広い農地や玉川上水などの自然環境など、数えきれないほどの団体の施設、環境が整っていると思います。そのような団体との協力や連携を十分に活用して、将来の担い手となる小平の子どもたちが心豊かに育つような体験活動が実施できると良いと思っています。

○小林市長

最初は音楽に関するお話でしたが、その後多岐にわたって、農業や奉仕活動、災害について、ま

た、スポーツについて、と幅広くお話いただきました。コロナ前であればできていたことがこの３年間で途切れてしまった中で、どれを復活できるのか、どれなら形を変えられるのかというところは工夫するところではあると思います。

地域の方やPTA、青少対などとしっかり結び付いて、一緒に子どもたちを育てていくんだという意識を持っていただいて、そして子どもたちの成長をまた一緒に見守っていただけるとありがたいと思います。人とのつながりということにもつながっていくのかなと感じたところです。

つづきまして、望月委員お願いします。

〇望月委員

まずは事務局が用意した資料を拝見させていただき、私がこの中で何を言うべきなのかと思っていたところです。基本理念である「学び・体験を通してお互いに認め合い、励まし合い共に生きるまち小平」ですが、学力のみならず子の成長を図ることが本当に大事だと思います。基本理念の下には「社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人の実現へ」とあり、こういう人が増えれば増えるほど小平はよりよくなっていくものだと感じています。

現在は「生き方」が本当に多様化していると思っています。今般学校で授業をさせていただく機会があり、私の職業柄ですが、「お金」に関する授業をさせていただく機会がありました。その授業では単にお金の計算をさせるのではなく、人生のこれから先をどう生きたいのかというお話をさせていただいています。

職業のことや、家族とどうありたいのかなどを小学校６年生と中学校３年生を対象にお話をさせていただき、グループワークをしながら人生計画を立てるようなことをしています。その中では、簡単に自分のやりたいことをあきらめてしまう子もいれば、どうしたらこれをできるんだろうかと何とかしがみついてその計画を実行できるように、落とし込んでいく子もいるなど様々です。これまでの経験を活用して、夢を夢で終わらせないような人に多くの子どもたちがなっていただきたいと思っています。

GIGAスクール構想の推進によって、各学校でのオンラインでの取組が当たり前になっていることを目の当たりにました。ZoomやMicrosoft teams、Googleなど、コミュニケーションツールが非常に増えて触れやすい状況になっていると思います。今後に関しては、コミュニケーションツールを見つけやすい状況になりましたので、子ども自身が見つけてくるものと、大人が子どもたちに与えるものの２つに分かれてくると思います。

私が特に大事であると思っているのは、心の体験の中に入りますが、感動体験と成功体験ではないかと思っています。感動体験ということで例を挙げると、私が自分なりに感じたこととしまして、登山ではないかと思っています。大変な思いをしてまで、なぜ山に登るのかと言われることもありますが、山を登った人にしか見ることができない景色がそこにはあります。写真で見る景色と、自分が大変な思いをして、苦労をしながら見た景色とでは全く違うものになると思います。

大人が与えるという視点で考えた場合ですが、１つは成功体験ではないでしょうか。実際の体験の

中に感動があるようなもの、ぜひそういった体験を提供したいと思いました。そういう体験活動を実施していただきたいと感じています。

また、TOKYO GLOBAL GATEWAY には私も視察に伺わせていただきました。ICT を駆使し、実際に海外に行ったような疑似体験できました。このような環境を提供することによって、今度は自分たちで海外に行ってみようと考える子どもたちが増えれば、ICT の使い方として望ましい姿ではないかと思いました。ICT に関しては、まずは興味的な情報を与えるという使い方がすごく良いと思います。

一方で、画面で見たものと、実際に見たものとは大きく異なることがあることや、情報がだいぶ限られてしまうこともありますので、情報提供の仕方に関しては少し工夫が必要ではないかと思います。

最後に、ブルーベリーのこともそうですが、食べ物のことを自分の子どもから聞いたことがなかったものですから、小平市のことについて知る機会がもっと増えたら良いと思いました。実際に近ければ近いだけ、経験をすると興味につながると感じています。「自分の住んでいるところでできているんだ」や「自分の身近にあるんだ」などといった興味から、だんだん好奇心に変わり、その後、小平に対する愛着につながっていく流れになると思います。ぜひとも近場の地域の体験をしていただきたいと思いました。

○小林市長

体験を通して、心の成長がはかられるとお話がありましたが、その通りだと思います。また、TOKYO GLOBAL GATEWAY は近いので、ぜひ活用して欲しいと私も思います。

小平市を知る機会があるといいとのお話がありましたが、小学校３年生では「私たちの小平市」の授業がありますが、それ以外の学校の授業で行うことは難しいかもしれませんが、例えば、ブリヂストンの新しい施設などの情報を子どもたちに伝えることや、農協が実施している収穫体験の中で、子どもたちが体験をできる機会があるということなどが知られていないという課題もあると思っています。

小平にはまだ農地がありますし、学童農園が市内の全ての学校にあることは１つの特徴であり、すごく良いと思っています。そうしたところ以外にもまだ農地がたくさんあり、農家も子どもたちから、こういうことをやりたいと提案があれば協力してくれると思いますので、そういったつながりを作っていければと思いました。

成功体験は本当に必要でして、子どもたちがどれだけ成功体験を積み上げられるかということは、自己肯定感の向上にもつながりますし、非常に大事なことだと思いました。成功体験は感動体験にもなりますし、感動体験は心が動くことにもつながりますので改めて大事だと思いました。

つづきまして、古川教育長お願いします。

○古川教育長

小林市長には、教育行政に対する深いご理解とご支援をいただき感謝しております。

先ほど各委員から発表がありましたが、体験活動の教育的意義については誰もが認めるものです。

先日、３年ぶりに実施した小学校の連合音楽会を参観しました。コロナ禍前は、１９校の小学校が午前と午後に分かれて１日で実施していました。現在、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のためルネこだいらでは、ステージに６０名以上は上がれない制約があり、今回は１９校を４つに分けて２日間で開催されました。

学年の人数が多い学校は、２～３グループに分かれて合唱や演奏を行いました。そのため、ドラムやティンパニーといった数少ない楽器は今までは一人しかできませんでしたが、複数の児童が演奏することができました。本物を体験することの良さを感じました。

また、以前では考えられなかった、同じ学校の児童に対する「頑張って」との応援の声が聞かれました。その様子を見て大変感動しました。本物を体験できたこと、人を応援できたことというのは、自らの成就感の向上とともに、他者との信頼関係も築くことができるとあらためて感じました。

小平市では食育に関わる体験的な学習活動も熱心に行われています。学童農園における野菜の栽培は全小学校で行っています。鯛の養殖日本一の愛媛県愛南町や、トビウオで有名な東京の八丈島との連携による学習活動も広がっています。今後も、体験活動を推進していくことが重要だと考えています。

しかし、学校教育においての体験活動は、授業時数との関連を計りながら実施していくことが必要です。教育課程の編成は各学校が行うことになっていますが、発達の段階に応じた体験活動の実施と、系統性を考えての計画が求められます。今後は、小学校と中学校の９年間を見通しての計画の作成が大切であると思っています。

また、小平市は、地域の皆様が熱心に活動していただいております。地域との連携による体験活動を進めていくべきであると思っています。

コロナ禍、状況に応じてオンラインによる教育活動も行ってきましたが、ウィズコロナ時代の中で、新型コロナウイルス感染症の拡大防止を徹底しながら体験活動が実施できるように学校を支援してまいります。

○小林市長

皆様からいろいろとお話を頂戴したところですが、望月委員初めて参加されていかがですか。

○望月委員

自分が置かれている立場や職業を考えると、私にしかない視点というのがあると思いました。

博物館では、来館する方にとっての学びを考えて展示等をしていただいていると伺い、見せる側と見る側が一緒になっていければ良いと思いました。今般いろいろなことをお話させていただき、思いをお伝えしました。１つでも多くのことが実施されると良いと思います。

○小林市長

青木委員いかがですか。

○青木委員

子どもたちに様々な体験を与えることがいかに大切か。子どもの口から出てくる「良かった」や「緊張した」という１つ１つの言葉を聞くと、体験することが子どもたちにいろいろな感情を抱かせ、いろいろな成長を少しずつ促しているのだと感じました。体験したからといってそれがすぐにその人の成長に現れるものではありませんが、その積み重ねが、もう少し大人になった時に、自信や自分の人生を決める１つの選択肢になると良いと思いました。学校は、一度に多くの子どもたちに体験させることができる環境にありますので、より多くの体験をさせてあげることは本当に必要なことであると感じています。

○小林市長

いろいろな所に連れて行ける家庭と、それは難しい家庭があると思いますので、子どもたちが平等に体験できるのが学校ならではと思います。

丸山委員いかがですか。

○丸山委員

小平は青少対が非常に盛んです。コミュニティ・スクールの中には青少対が母体となっているところもあります。青少対は、子どもたちの健全な育成のために、いろいろな経験をさせることもコンセプトの１つだと思います。地域の人々や異年齢の老若男女が集まって、子どもたちに関わり、成長していくという意味では、市長が初めにおっしゃった「人づくり」という点で、青少対やコミュニティ・スクールの存在は大きいと感じています。今後はそれらの活動がもっと活発になっていくと良いと思いました。

○小林市長

青少対は、本当に一生懸命に活動していただいていてありがたいと思っています。一方で、学校に関わることがなく、青少対をそもそも知らない地域の方もいらっしゃると思いますので、そういう方にももっと関わっていただければより一層力になると思いました。

三町教育長職務代理者いかがですか。

○三町教育長職務代理者

これからの時代、ここから１０年、２０年のスパンにおいて、どのように地域で子どもを育てていくのかというシステム作りを考えていかなければならないというのが１つです。

また、いろいろな所で話を聞いていると、学力はペーパー学力であるというイメージが非常に強いと感じます。「学力だけではなく」と言っている方が多いです。学力の中には、心も含まれます。教科

でいえば道徳の授業についても学習評価をします。その評価はその子の道徳面の学力です。「学力のみならず」という言葉は使わないでいただきたいと思っています。

宿泊行事というのは、様々な体験活動の集大成であり、全ての狙いをかなり幅広く捉えた活動であると思います。宿泊行事の内容の工夫や、学年の拡大などによって、子どもの心は成長していくのではないかと改めて感じました。

○小林市長

いろいろな体験活動を重ね合わせることで、後で思い出しやすくするというお話がありましたが、宿泊行事をするだけで、いろんな体験が盛り込まれてくると改めて思いました。

全体の話を聞いて古川教育長いかがですか。

○古川教育長

宿泊学習の見直しは必要になると思っています。小学校６年生はどちらかというと文化や歴史の学習が中心であり、中学校１年生は体力向上を目的としたスキー教室となっています。中学校３年生になると京都や奈良、金沢に修学旅行に行っていますので、集大成という位置付けであると思っています。どの学年でどういうことを体験し、結果として９年間でこういう子どもたちを育てますという考え方は大切であると思いました。

○小林市長

以前に開催された子ども議会において、子どもの切実な声として、宿泊の行事を増やして欲しいという発言があったことを思い出しました。

新型コロナウイルス感染症により直接体験の機会が減少する中、学校現場の工夫により、ＩＣＴを活用した間接体験や疑似体験などが行われていることは、安心材料のひとつでありますが、直接体験でしか得られないものもあると実感しております。

本日の協議において、子どもたちの発達段階に応じて行われる体験活動や、異年齢集団との体験活動、地域の手を借りながら行う体験などについて、ご意見とともに、具体的なアイデアなどもご披歴いただきました。

学校現場における体験活動を維持し、もう一歩前進させていくためには、様々な資産や、地元の企業などとのネットワークと、学校現場における創意工夫が必要と思われます。今後より一層、充実した体験活動が実施できるよう、教育委員会と連携を取ってまいりますので、よろしくお願いいたします。

（閉会）

○小林市長

それでは本日の議題は以上となります。

今年度の総合教育会議はこれで終了となります。来年度１回目の総合教育会議について、例年は、７月頃に開催しておりますが、新たな教育振興基本計画のもと、小平市の教育に関する大綱の見直しを早期に実施したいと考えておりますことから、開催時期を５月頃に前倒ししたいと思っております。

詳細は、おって事務局より皆様にご案内させていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議はこれで閉会といたします。